

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	金 ダウミ
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部 教授	國領 二郎
	副 査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部 教授	飯盛 義徳
	副 査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部 准教授	琴坂 将広
	副 査	メディアデザイン研究科	教授	大川 恵子
学力確認担当者：				
金 ダウミ君の学位請求論文は、「Managing Narrative Architecture for Prejudice Reduction」と題され、全 11 章で構成されている。今日のソーシャルメディアは国境を超えて多様な人々をつなぎうる機能を有しながら、現実には民族間の偏見や対立を煽る場となっている矛盾を抱えている。本論文はこの問題を解決すべく、金君自身が運営する Ethnic Neighborhood という YouTube チャンネルをフィールドとして行ったアクションリサーチの成果を記したものである。 本研究では第一段階として Pettigrew&Tropp の intergroup contact theory を起点とし、同都市（中国広州）において形成されている三つの民族（コンゴ、ソマリア、ウイグル）グループについて作成された YouTube ビデオがどのような emotion を形成するかについて分析を行っている。結果として類似の動画が大きく異なる emotion を生み出す現象が観察された。この原因を分析する中で intergroup theory の改良モデルとしてアルゴリズムや語り部（Storyteller）の役割取り込んだ networked narrative のフレームワークが導出された。第二段階では導出されたモデルを元に追加的に収集されたデータを加えて分析が行われた。結果として、視聴者が動画に到達する経路などの影響が強く認められた。これらの観察を元に金君は従来の narrative 論よりも多くのプロセスを全体として考える narrative architecture という考え方で偏見のマネジメントを行うことを提唱している。 各章ごとの概要は以下の通りである。第 1 章においては、まずソーシャルメディアにおける民族偏見に関する現状の記述と、金君の矛盾の原因を理解し解決する問題意識が語られている。そして、アクションリサーチの場としての Ethnic Neighbourhood の説明がおこなわれている。また、得られるデータを学術的に分析する上での基礎的理論的フレームワークである intergroup contact theory の採用が述べられている。 第 2 章においてはソーシャルメディアを超えてより一般的に民族間の偏見の醸成とその克服過程のモデルについて先行研究の検討を行っている。人々のグループへの帰属願望と、それが他グループのステロタイプ化と偏見の醸成つながり、人々の具体的な差別的行動に結びつくプロセスについては多くの先行研究がある。偏見解消に必要な要素やプロセスについても研究の蓄積がある。それらの中から intergroup contact theory が選択され、同理論に基づく（1）知識獲得、（2）不安解消、（3）共感 - empathy-醸成が偏見解消につながるというモデルの採用が説明されている。 第 3 章においては本研究のフィールドとなった YouTube 上の Ethnic Neighbourhood プロジェクトの説明が行われている。NHK 国際放送で番組制作をしていた金君が仲間とともに世界のさまざまな地域に存在する民族コミュニティを映像取材して紹介してきた取り組みである。2024 年 12 月 30 日現在で動画 40 本、373 万回余視聴、チャンネル登録者 3.7 万人を擁しながら持続的に活動を進めている。中国、日本、トルコ、韓国、米国に存在するコンゴ人、ウイグル人、ソマリア人、中国人、パキスタン人、エチオピア人、				

ガーナ人、ナイジェリア人、ブラジル人、イエメン人、パレスチナ人、シリア人、イラク人、モン人、アラブ人、セルビア人のコミュニティの動画を提供している。多様な民族を扱いながら動画は民族の文化、宗教、習慣、生活の紹介など、ほぼ同じストーリー(narrative)で構成されている。

第4章では本研究が採用したアクションリサーチの手法について解説が行われている。そして本研究が同方法論が提唱する問題特定、介入設計、結果評価、理論化という手順にそって行われたかが説明された。その中で偏見の醸成に影響を与えうる多くの要因を極力除去すべく、同じ都市(中国広州)において取材を行った三つの民族コミュニティ(コンゴ人、ウイグル人、ソマリア人)を選んだことの説明などが行われている。

第5章では選ばれた動画をめぐるコメントが、どのように知識獲得、不安解消、共感醸成を通じて当該民族への感情(emotion)につながったかを分析している。結果として、ほぼ同じ動画内容の構成であるにも関わらず、それらが結果として生み出す emotion には大きな差異があることが観察された。その原因として、どのような各動画の視聴に異なる層の人間が誘導されていること、善意あるいは反感がもたれると増幅するようなコメントが引き寄せられることなど、アルゴリズムの影響が認められた。また、チャンネル主宰者や出演者への信頼を寄せるチャンネルのファン層が emotion の改善に寄与していることも分かった。なお、emotion の分析にあたっては、直近の研究動向が LLM が emotion についてより精度高い評価を下すという研究成果を踏まえて LLM による分析を行った(結果の安定性を確認するために複数の LLM で検証したが主として大きな差がないため ChatGPT 3.5 を用いている)。

第6章では前章の分析を受けてモデルの修正が行われた。知識習得、不安解消、共感、に影響を与える要因としてアルゴリズムと「語り部(storyteller)」が加えられ、ソーシャルメディアの特性を反映した networked narrative のフレームワークのモデルとした。

第7章では、第6章で得られた知見をベースに、YouTube からチャンネル主宰者に提供される訪問者の訪問経路や滞在時間などのデータおよび、storyteller に関する言及などを分析することによって新たに加わった要因が影響を及ぼす過程について分析が深められた。コメントを書き込んだ人間がアルゴリズムの推奨に従ってきたものであるか、他民族の理解を求めて検索をしてきたものであるか、チャンネルのファンで Ethnic Neighbourhood の様々な動画を見ているものなのか、などの訪問経路が大きな影響をもっていることが確認された。中でもチャンネルのファンは emotion の改善に大きく寄与していることなどが観察された。

第8章では以上の研究から得られた知見が理論的な意味について議論が展開されている。従来の narrative 論に比して多くのプレーヤーが複雑に絡んで帰結を生んでいること、narrative がメディアのコンテンツ発出(この研究においては動画公開)後も動的に変化することなどから、ソーシャルメディア時代における民族間偏見の解消は従来の intergroup contact のフレームワークを超えて networked narrative のフレームワークで考えなくてはならず、そのマネジメントにあたっては narrative architecture という概念を構築することが有効であるとの主張がおこなわれている。

第9章では前章で打ち出された narrative architecture の概念が先行研究のレビューなども行いながらさらに展開されている。この概念を入れることで、単に理解するだけでなく、民族間の相互理解が進む空間の設計論に展開することができると主張している。さらには設計上の操作可能な変数の特定なども試みられている。

論文審査の要旨及び担当者

No.3

第 10 章では全体のまとめが記述されている。

第 11 章では本研究の限界と未来の研究アジェンダが提示されている。本研究は網羅的ものではなく、アクションがとられたサイト内における事例研究となっており、外的妥当性についてはおのずと限界がある。また、英語によるコメント空間の分析となっており、多言語空間においてどのようなことが起こるかはわからない。さらにアクションリサーチとして行われたために、時間の経過とともに動画の構成が微妙に変化していることも否定できない。

本論文の最大の意義はソーシャルメディアをめぐる国家や民族間の対立が深刻な問題となっている中で、偏見が生まれ、取り除かれるプロセスについて、実証的な知見を提供していることと言っていいだろう。近年話題になることが多いプラットフォームのアルゴリズムが偏見の文脈形成に与える影響についてチャンネル主宰者として得られるデータを元に実証的に明らかにしたことの意義も大きい。

一方で金君自身が認めている通り、得られた知見についてどの程度汎用性があるかについてはさらなる検証が必要であろう。

そのような限界を踏まえた上でも、急激に変化するネット社会の現象に既存のフレームワークをあてはめながら理論を進化させていき、ソーシャルメディアの時代に適合するものとした貢献は大きい。審査委員会としては、本論文が金君の社会貢献に向けた熱い思いと実践的な活動を可能な限り学術的なフレームワークを踏まえて進化させた、SFCらしいものとなっていることも高く評価したい。

以上によって、本学位審査委員会は金　ダウミ君が博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。